

【 復活のトロパリ 第2調 】



しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死 生 命 爾 死 降
と き、かみのせいひかりにてぢご
時 神 性 光 地 獄
くをころせり。しせしものをちかよ
殺 死 者 地 下
りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復 活 時 天 軍 皆
よびていえり、いのちをたもうしゅ
呼 曰 生 命 賜 主
ハリストわが神みよ、こうえいはなんぢに
吾 神 光 榮 爾 になんぢに
き 帰 す。

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒 等 同 座 者 忠
じつにしてしんちなるハリストのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖
なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい
神 撰 笛 愛
にみちたるうつわ、わがくにのこう
に満 器 我 國 光

しよ うしゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ
照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 なん ち の ぼ く ぐ ん の た め 、 お よ び
爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
全 世 界 の 爲 生 命 を 賜 も う せ 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
三 者 祈 り 給 へ

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

せ い せ い しゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に なん ち を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 なん ち は は じ め わ が く に に お い て お の
爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い しゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト の
外 來 者 知 れ ど も 、 ハ リ ス ト の

ひ か り と あ た た か き を な が し 、 なん ち の て
光 暖 た か き を な が し 、 なん ち の て
敵



きをぞくしんのことな爲し、かれらにか
 属神子爲 彼等に神
 みのおんちようをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにより
 今 此 教 會 の 爲 に 祈
 たま え、けだしわれらそのしよしはなん
 給 え、蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 よ 慶
 べ よ。

【 復活のコンダック 第2調 】



いまもいつもよよに、アミン。
 今 何時 世 世 に、アミン。
 ぜんのかゆうせいしゅよ、なんぢはかよりふ
 全 能 救 世 主 爾 墓 復
 くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
 活 地 獄 奇 蹟 を 見
 おののき、ししはお起き、ぞうぶ物
 お 慄 死 者 起 き、造 物
 つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
 見 爾 と 偕 よ 喜 び、アダムは

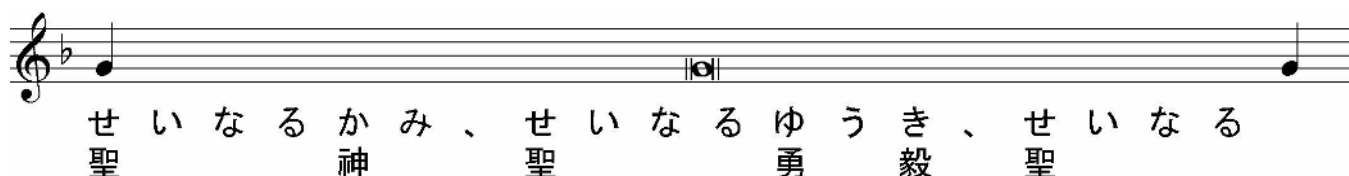


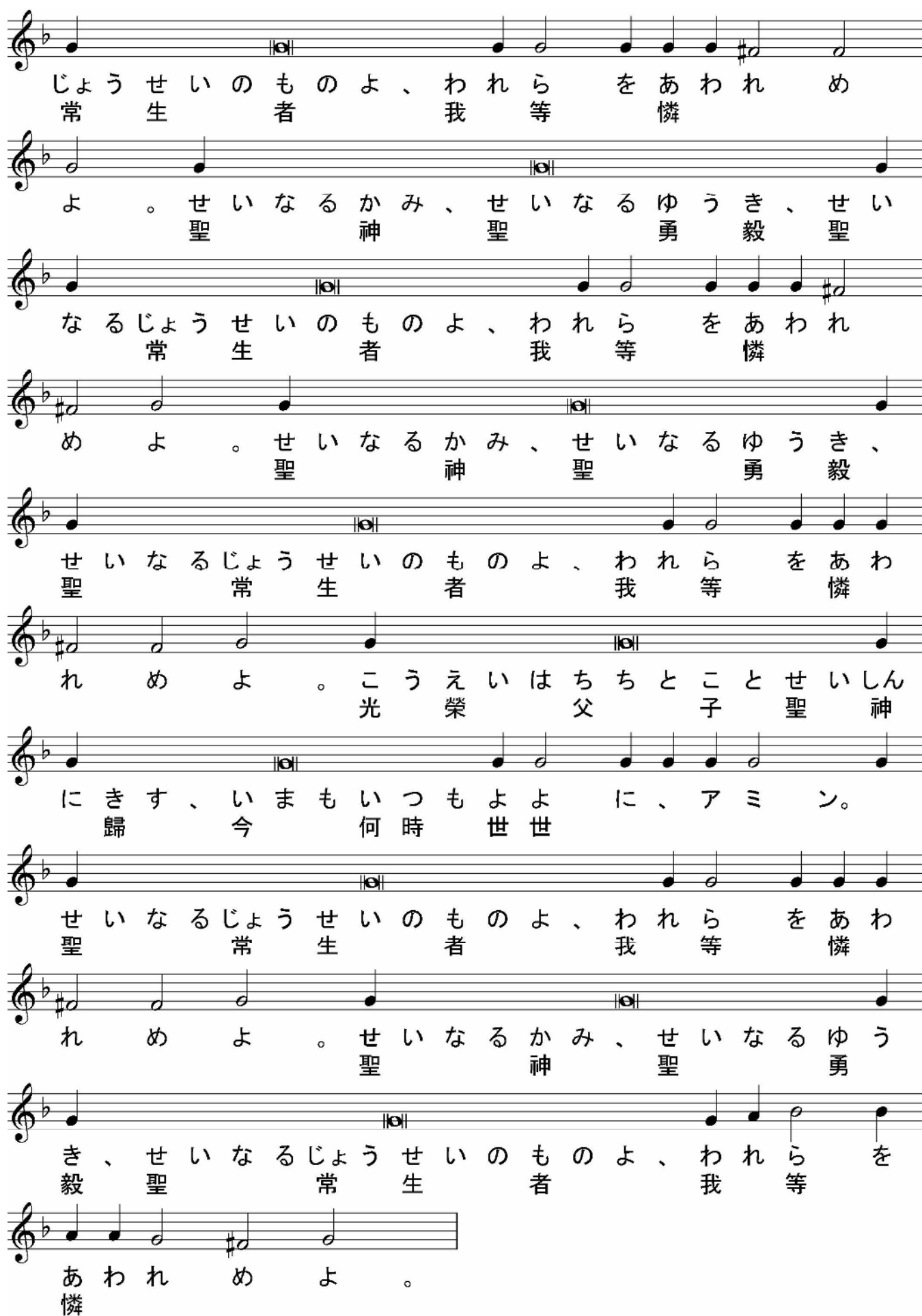
司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が
聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる
ものとなしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈
と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖
なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、



【 聖三祝文 】





じょうせいのも、われらをあわれめ
常生者我等を憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖なる神聖勇毅聖

なるじょうせいのも、われらをあわれ
常生者我等を憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖なる神聖勇毅

せいなるじょうせいのも、われらをあわ
聖常生者我等を憐

れめよ。こうえいはちとこせいしん
光栄父子聖神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸今何時世世に、アミン。

せいなるじょうせいのも、われらをあわ
聖常生者我等を憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖なる神聖なる勇

き毅、せいなるじょうせいのも、われらを
聖常生者我等を

あわれめよ。
憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第2調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん
愼みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) プロキメン、しゅ わ ちから わ うた かれ わ すくい
プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り 。
救

誦經) しゅ きび われ ばつ われ し わた
主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り 。
救

誦經) しゅ わ ちから わ うた
主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と な れ り 。
彼 我 救

【 アポストロス 使徒經 88端 ロマ書5章1節～10節 】

司祭) えいち
睿智、

誦經) せいしと じん たつ しよ よみ
聖使徒パウエルが羅馬人に達する書の讀、

司祭) つつし き
愼みて聽くべし、

誦經) けいてい こ ゆえ われら しん もつ ぎ かみ わぼく え わ しゅ
兄弟よ、是の故に我等は信を以て義とせられて、神と和睦するを得たり、我が主イイス



誦經) ^{ねが}願わくは主は ^{しゅ}憂 ^{うれい}の日に於て ^ひ爾 ^{おい}に聴き、^{なんぢ}イアコフの神の名は ^き爾 ^{かみ}を扨ぎ衛らん、^な
^{なんぢ} ^{ふせ} ^{まも}



誦經) ^{しゅ}主よ、^{おう}王を救え、^{すく}又我等が ^{またわれら}爾 ^{なんぢ}に呼ばん時、^よ我等に聴き給え、^{とき}
^{われら} ^き ^{たま}



司祭) (黙誦：人^{ひと}を愛する主^{あい} 宰^{しゅ}よ、我が^{しゅさい} 心^わ に神^{こころ}を知る智慧^{かみ}の ^し 淨^{ちえ} き 光^{いさぎよ} を 輝^{ひかり} かし、我が思^{かがや}
^わ ^し

念^{ねん}の目を啓きて、爾^め が福^{ひら} 音^{なんぢ}の 教^{ふくいん} を 悟^{おしえ}らしめ給え、我が衷^{さと}に 爾^{たま} の福^わたる 誠^{うち} ^{なんぢ} ^{ふく} ^{いましめ}

を畏^{おそ}るる 畏^{おそれ} をも入れて、我等^いが 悉^{われら} くの肉^{ことごと} 體^{にくたい}の慾^{よく}を踏^ふみ、凡^{およ}そ 爾^{なんぢ} の 喜^{よろこ}ぶ

所^{ところ} を思^{おも}い且^かつ 行^{おこな}いて、屬^{ぞくしん} 神^{せい}の生^{いかつ} 活^すを過^{いた}ぐるを致^{たま}させ給え、蓋^{けだし} ハリス^{かみ}トス神

よ、爾^{なんぢ} は我が^わ 靈^{たましい} と 體^{からだ} との光^{こうしょう} 照^{われらなんぢ} なり、我等^{なんぢ} 爾^{むげん} と 爾^{ちち} の無^{しせいし} 原^{げん}の父^{ちち}と至^{しせいし} 聖^{せい}至^{せい}

善^{ぜん}にして生命^{いのち}を 施^{ほどこ} す 爾^{なんぢ} の神^{しん}とに光^{こうえい} 榮^{けん}を獻^{いま}ず、今^{いま}も何^{いつ}時^よも世^よ世^よに、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書18 端 6 章22～33 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、^{つつし} 肅^たみて立^{せいふくいんけい}て聖^き 福^{しゅうじん} 音^{へいあん} 經^{へいあん}を聴^きくべし、衆^{しゅうじん} 人^{へいあん}に平^{へい} 安^{あん}、



司祭) マトフェイ^{でん}傳^{せいふく}の聖^{いんけい}福^{よみ}音^の經^の讀、



司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、主^{しゅい}曰^みえり、身^みの燈^{ともしび}は目^めなり、故^{ゆえ}に若^もし爾^{なんぢ}の目^め淨^{きよ}からば、爾^{なんぢ}の全^{ぜん}

身^{しん}明^{あきら}ならん、若^もし爾^{なんぢ}の目^め惡^{あし}からば、爾^{なんぢ}の全^{ぜん}身^{しん}暗^{くら}からん。故^{ゆえ}に若^もし爾^{なんぢ}の中^{うち}の光^{ひかり}

は暗^{くら}たらば、則^{すなわ}ち暗^{くら}は如何^{いか}にぞや。人^{ひと}は二^{ふた}人の主^{しゅ}に事^{つか}うる能^{あた}わず、蓋^{けだ}し或^{ある}は此^{これ}を

惡^{にく}み、彼^{かれ}を愛^{あい}し、或^{ある}は此^{これ}を重^{おも}んじ、彼^{かれ}を輕^{かろ}んぜん、爾^{なんぢ}等^らは神^{かみ}と財^{たから}とに兼^かね事^{つか}うる

能^{あた}わず。故^{ゆえ}に我^{われ}爾^{なんぢ}等^らに語^つぐ、爾^{なんぢ}等^らの生^{いのち}命^{ため}の爲^なに何^{くら}を食^{なに}ひ、何^{なんぢ}を飲^のみ、爾^{なんぢ}等^らの身^{からだ}體^のの

爲^{ため}に何^{なに}を衣^きんと慮^{おも}んばか、なかにいのちかて、おおいからだころも、おおいあら

や。試^{こころ}みに天^{そら}空^{とり}の鳥^みを觀^{かれ}よ、彼^ま等^かは稼^{くら}かず、穡^つらず、倉^{しこう}に積^{なんぢ}まず、而^{てん}して爾^{ちち}等^のの天^のの父^の

は之^{これ}を養^{やし}な、爾^{なんぢ}等^らは彼^{かれ}等^らより甚^{はな}だたつと、あらかつなんぢらうちだれ、おもんばか

其^{その}身^みの長^{たけ}一^{いっ}尺^{しゃく}だに延^のぶるを得^えん。衣^{ころも}の爲^{ため}に何^{なん}ぞ慮^{おも}んばか、こころみのゆり、いか

長^{ちよう}ずるを觀^みよ、勞^{はたら}かず、紡^{つむ}がず、然^{しか}れども我^{われ}爾^{なんぢ}等^らに語^つぐ、ソロモンも其^{その}榮^{えい}華^がの極^{きわ}に

於^{おい}て、其^{その}衣^{ころも}猶^な此^{この}の花^{はな}の一^{ひとつ}に及^{およ}ばざりき、今^{こんにち}日^あ在^みり、明^み日^{よう}爐^にに投^なげらるる野^のの草^{くさ}

にも、神^{かみ}は斯^かく衣^きすれば、況^いや爾^{なんぢ}等^らをや、小^{しょう}信^{しん}の者^{もの}よ。故^{ゆえ}に慮^{おも}んばか、われらなに

食^{くら}ひ、或^{ある}は何^{なに}を飲^のみ、或^{ある}は何^{なに}を衣^きんと云^いふ勿^なれ、蓋^{けだ}し此^これ皆^{みな}異^い邦^{ほう}人^{じん}の求^{もと}むる所^{ところ}なり、

爾^{なんぢ}等^らの天^{てん}の父^{ちち}は此^{これ}等^らの者^{もの}の皆^{みな}爾^{なんぢ}等^らの必^{ひつ}要^{よう}なるを知^しる。爾^{なんぢ}等^ら先^まづ神^{かみ}の國^{くに}と其^{その}義^ぎとを

求^{もと}めよ、然^{しか}らば此^{これ}等^らの者^{もの}皆^{みな}爾^{なんぢ}等^らに加^{くわ}わらん。

(比較用 口語訳) 主は言った。目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう。だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。それだから、あなたがたに言うておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン) へ